

研究ノート

そこには顔が吹いていた

渡辺 直行

はじめに

最近の医者は患者の顔を見ないというが、「顔」を或る哲学者風に解釈すれば、その現象は少子化を介して都市化に繋がり、その繋がりに今日の国土政策の本質的な課題が感じられる。

というのは単純な連想だが、「都市化」は既に30年近くも前に「都市型」と言い直された。そしてその頃から「田園回帰」と言われる動きも出てきた。

1. 作業の内容

今回は市町村別に中枢拠点都市（以下「拠都」という）までの時間距離を計算し、それと人口の社会・自然増加率との関係を見る。データは前回と同じ2014年の人口動態統計である。拠都は61の「地方中枢拠点都市」の他、都区部、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市とした。

時間距離の計算は都道府県単位で行った。他県との関係が強い市町村もあるが（例えば山梨県丹波山村など）、今回は考慮していない。ただし滋賀県は京都市を、長崎県対馬市は福岡市を拠都とした（博多航路）。

大都市圏は圏域単位とした。東京圏は埼玉、千葉、東京、神奈川、名古屋圏は愛知、近畿圏は滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良の各都府県である。

時間距離は路線検索に拠ったが、路線バス、フェリー等利用の場合は自治体のホームページ情報、バス会社の時刻表等に拠った。

自治体のホームページはトップページに「ようこそ」とか「移住大歓迎」などと表示してされているものが多いが、アクセス方法が記載されていないものや、記載されていても容易に見つけられないもの、「工事中」になっているもの、「〇〇駅からバス」と書かれているだけで停留所名も所要時間も表示されていないもの、いきなりバス会社のホームページにリンクしているもの等、様々であった。全国の自治体が協議するなどしてホームページのガイドラインのようなものを作れば、その便益は大きいものと思われる。

2. 拠都までの時間距離と人口増加率との関係

図1は拠都までの所要時間と人口の社会増加率、自然増加率との関係を県ごと（大都市圏は圏域ごと）に見たものである（大都市圏は最後にまとめている）。一般的には、拠都へ行く用事が頻繁に発生し、かつ、時間価値が高い人、あるいは拠都への愛着が強い人ほど拠都の近くに住み、その他の人は拠都とはあまり関係なく住む、という傾向が生まれると思われる。

図1を見ると、拠都に近いところほど人口の社会増加率、自然増加率が大きいという傾向は、程度の差はあれ、多くの県（圏）で見られる。その傾向は大都市圏や拠都の人口規模が大きいところほど顕著であるが、かなり不鮮明である県も多い。拠都から離れたところでU字型、V字型で増加率が反転して高くなるところもかなりある。拠都に

拠点的意味があるのか否か疑問に思う県も少なくない。

図2は、時間距離帯別（30分ごと）に人口変動の平均値を計算してグラフにしたものである。拠都の人口規模が小さい順に県・圏を並べてある。県ごとに様々な形が見られるものの、相対的に拠都の人口規模が小さい県で増加率の反転がよく観察され、大都市ほど右肩下がりの傾向がよく観察される。

3. 都市化と少子化

図3は県・圏単位で拠都の人口規模と人口の社会増加率、自然増加率との関係を見たものである。図4は拠都の人口規模と合計特殊出生率との関係を見たものである。合計特殊出生率の数値は『合計特殊出生率 本当の都道府県ランキング』（東北大学、平成27年6月）を用いている（東京圏、近畿圏は人口動態統計の出生数を同数値で除したもので加重平均して算出している）。

『養老孟司が語る「わかる」ということ』によれば「そういった（意識の）世界をつくっておいで少子化だとか（中略）言っているのは腹が立つ」ということであるが、図4はそのような見方に沿う形になっているようである。図5、図6は東京圏を除いて描いたものであるが、同様の傾向が見られる。

図8は図3、図4を重ねて描いたものである。これから人口急減対策として2つのものが容易に想像できる。ひとつは大都市圏の環境整備であり、もうひとつは田園回帰である（図9）。効果の大きさでは図の両極に大きな意味があるように思われるが、これらは前回の最後に紹介した議論と関係する部分が（政策の方向は異なるかもしれないが）少しある。

東京の課題としては都市間競争や国際都市化などを掲げるものをよく見かけるが、集積の利益で都市間競争する時代は既に終わっている。もちろん創造性で競う時代においても分散とともに集中の力も働くかもしれないが、その集中は前世紀とは様相を異にするに違いない。環境問題、社会問

題を考えるならば、そして何より人間の生活を考えるのであれば、また、本当に東京で「都市間競争」するつもりなのであれば、逆説的ではあるが、江戸時代の環境を取り戻していくことが効果的であるように思われる。自然の再生、土に近い生活の回復、人工物の縮減が東京の最重要課題であろう。

おわりに

昨今では「顔」だけでなく「手」も見えなくなりつつあるという。そういう時代に「見える手」の時代感覚で政策を考えたら、飛行機の時代に巨大艦船を建造することになってしまう。ここで国土づくりの方向を誤ったら、将来世代に取り返しのつかない負担を残してしまう。

などということを考えているうちに蝉が鳴き始める季節になり、それで蝉と鳩の話を思い出し、そこから或る民族学者の言う「答える資格のないどんな問題にも決着をつける習慣をもつ人たち」を連想し、それは結局「顔」の話に繋がるように思われる。

などということを「顔」を全く見ず「資格」も全くない人間が「手」だけで書いているのだから、自分を嗤わざるをえない。

[わたなべ なおゆき]
[元（財）土地総合研究所勤務]















